

2. 第1セッション

「知の構成と放送—学術研究と番組制作の対話—」

○総合司会

それではただいまから、第10回放送利用の大学公開講座、シンポジウム第1セッションに入らせていただきます。

この第1セッションは、主管機関の名古屋大学、名古屋テレビ放送、東海ラジオ放送の担当で進めてまいります。

第1セッションの司会は、名古屋大学教育学部今津孝次郎教授でございます。

それでは、今津先生、よろしくお願いいたします。

○司会（今津孝次郎名古屋大学教育学部教授）

名古屋大学の今津でございます。第1セッションの司会を担当させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第1セッションのテーマは、「知の構成と放送—学術研究と番組制作の対話—」という言葉掲げさせていただきました。表現は、大見えを切ったような表現でございますが、この第1セッションのテーマの内容は、非常に日常的な問題でございます。放送公開講座の授業に携わる私たちにとりましては、恐らく全国各地の大学の先生方、あるいはスタッフの方々が、日常いつも気にされている問題、悩まされている問題、努力されている問題ではないかということでございます。非常に日常的で身近な平凡なテーマでございますので、どうぞ普段着のまま、ご参加いただくようにと思いますので、よろしくお願いいたします。

では早速、本日のパネリスト及びコメンテーターの方々を、最初にご紹介させていただきます。大変失礼ではございますが、さんづけで呼ばさせていただきますので、ご了承願います。

まず、皆様方から向かって左手の方になりますが、名古屋大学工学部教授田坂さん。続いて、北海道放送報道制作局次長吉田さん。お隣、中国放送ラジオ局放送制作センター専任部長田島さん。そして、民間放送教育協会プロデューサー井出さんです。以上パネリストの方々です。

コメンテーターといたしまして、放送教育開発センター教授多田さんをお願いいたします。（拍手）

それでは、第1セッションの進み方につきまして、若干ご説明を申し上げます。

皆様方の袋の中に、1枚のワープロで印刷したものがございますが、第1セッション「知の構成と放送」のレジュメが入っておりますので、そちらの方をごらんいただきたいと思います。

テーマの内容につきましては、プログラムのとおりでございますので、繰り返す必要はないと思います。

まず、テレビのドキュメントを1本ごらんいただきたいと思います。これは「知を構成する」というタイトルでつくられたものでございまして、4年度、名古屋大学のテレビ放送公開講座「環境を考える」の第5回「原子力発電の環境」の番組制作過程をドキュメントした

ものでございます。約35分ほどでございます。その後、3人のパネリストの方々に、お1人10分ほどコメントをいただきます。そして全体討議につなげていきたいと思ひます。大体4時をめぐにして進めていきまして、4時あたりで1度休憩を入れさせていただきます。

休憩の後、もう1本ドキュメントをごらんいただきます。これは、やはり名古屋大学で開きましたラジオ放送公開講座「現代人の心の健康」の中から、第5回の番組「登校拒否―家庭と学校のはざまで―」の制作過程のドキュメントを約5分ほどごらんいただきます。その後、お1人のパネリストの方、そしてコメンテーターの方にお話をいただきまして、総括討議をして、5時をめぐにいたしまして終わりにするということでございます。

それでは早速、35分ほどのテレビドキュメントをごらんいただきたいと思ひます。

[V T R]

○司会（今津）

今のドキュメントをごらんいただきまして、パネリストの方々にまとめていただきたいと思ひます。

その前に、私の方から一言だけ、議論の論点について整理させていただきたいと思ひます。と申しますのは、取り上げられている話題が原子力発電ですので、これは原発の是非を論じる場ではございません。別に原発でなくても、例えば脳死でも、それ以外のテーマでもよろしいわけですが、ただ、原発の是非という議論が飛び交いまして、この会場が紛糾いたしましても困りますので、若干私の方で、こういうふうに議論を整理させていただきたいと思ひます。

ここに示しましたのは、大学と地域の人々と放送メディアとの関係を整理したものであります。言うまでもなく、放送公開講座と申しますのは、大学が放送メディアを使って、生涯学習の機会を地域の人々に提供するわけでございますけれども、実はもう一方では、それを通じまして、地域の人々の知に対するニーズに、大学がどこまでこたえていくことができるかという役割を担っていると思うんです。

ここ2～3年、急速に大学の自己評価ということが全国で活発に議論されるようになってきたわけですが、いつまでも大学は自分のところに閉じ込もっていることはできない。しかも、大学の自己満足は、もう今の時代では許されない。地域の人々の求めにどこまでこたえられるか。こたえられたときに恐らく、その地域の人々が大学に対して理解を示し、そして、いろいろな形で支援をしてくださるのであろうという役割も、また一つあるわけであります。そういう環境の中で、放送メディアの位置を改めて考えてみますと、この図に示しましたように、実は地域の人々の位置に非常に近いのではないかと思います。

なぜかと申しますと、まず、放送メディアは不特定多数の人々を対象にしております。ところが大学というのは、限られた目の前にいる大学生が対象です。そして、学術研究を展開をする場合に、常に頭の中に気になりますのは、「研究の仲間、学会の仲間がどのように評価をしてくれるだろうか」ということに気をとられて、多くの場合、不特定多数の地域の人々は余り念頭にないのではないかと。

それに対しまして、放送メディアはまさに、その不特定多数の人を相手にテレビ、ラジオ放送をやっているわけですから、人々のニーズに非常に敏感である。また敏感にならざるを

得ない。そういうニーズにどうやってこたえていくかというのが、放送として求められてくる毎日の活動ではないかと思うわけであります。

もう一つ、大学と放送メディアの違いは、レジュメの右側のページにも整理してございますけれども、学術研究の考え方と放送の考え方は質的に違うと思います。

どちらかといいますと、放送メディアは、不特定多数の人々の日常の暮らしの考え方、あるいは感受性に近い性質を持っているのではないかと。

それに対して大学は、やや日常生活からは距離を置いたところに、また距離を置いているからこそ、学術研究も、次の新しい時代を切り開いていく役割も大きいと言えます。そういう面から言っても、放送メディアの性質と大学の性質は違う。この円で示しましたように、地域の人々に近いところにあります。

したがって、今ごらんいただきました原子力発電のことですが、ディレクターの方や司会の方が非常にこだわっているのは、不特定多数の視聴者の方が、原子力発電に対する不安とか問題意識がある。それに大学側はどうこたえられますかというスタンスといいますか、立場をとらざるを得ない。これは原子力発電だけではなく、恐らく休憩の後、後半に出てまいります登校拒否の問題でも、同じような問題が登場するかと思います。したがって、少しこういう図を頭の中に入れておいていただきまして、そして、次のような問題を議論の論点としたらいかがでしようかと思うわけであります。

お手元のレジュメをごらんいただきたいと思います。3として「学術研究と放送番組制作の相違性」と書いてございます。論理の違いがあるのではないかと。この二つの違った論理が、どうやって歩み寄っていくことができるかが、恐らくこれまでの課題であったし、これからの課題になってくるということで、これからのご討議の論点といたしまして、司会の特権を使わせていただきまして、4を読み上げます。

(1) 学術研究と放送の対話。

- 1) 知の構成から見て、大学放送公開講座制作のこれまでの取り組みはどうであったか。
- 2) 学術研究と放送番組制作との間にある対立、葛藤、そごなどは、具体的にはどのようなものか。
- 3) そうした対立、葛藤、そごなどは、どのように乗り越えられているか、あるいはないか。
- 4) 学術研究にとって、放送の持つ意味は何か。
- 5) 放送にとって、学術研究の持つ意味は何か。
- 6) 変動する時代は、両者相互の歩み寄りを求めているのではないか。
- 7) 両者の利点を結び合わせると、そこから何が生まれるのだろうか。

(2) 大学と放送局の役割分担。

- 1) 講座全体の大テーマは、どのように選択して設定すればよいか。
- 2) 毎回の小テーマは、どのように選択して編成すればよいか。
- 3) テキストと放送番組内容は、どのように関係づけければよいか。
- 4) 各番組構成案は、どのように作成すればよいか。
- 5) 番組の導入、展開、編集部は、どのように検討し考察すればよいか。

6) 映像素材、音声素材は、どのように取材、入手し、どのように活用すればよいか。

まだほかにもあると思いますが、以上13点にわたりましてクエスチョンマークをつけさせていただきました。このクエスチョンマークを、どういうふうに解決をしていくかという形でご討議をいただけたら、いかがかと思しますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今のドキュメントの中で登場していただきまして、大変ご迷惑をおかけした、田坂講師の方から、まずお願いいたします。

○名古屋大学（田坂完二工学部教授）

大体はこのビデオで尽きているんですが、ちょっと短く補足させていただきますと、私自分の欠点として、何でも気軽に引き受けて、後でえらい目に遭うパターンで、今回もシンポジウムでちょっと話してくれというので、軽く考えておりましたら、こういう専門家の集会である。公開講座の大学の方から電話がかかってきて、断るにはいろいろ理由が要って、「忙しい」ととりあえず逃げようというのが出発点なんです。放送公開講座については素人ですし、私の申し上げることが適切かどうかわかりませんが、素人の意見でも参考になる面があるかと思しますのでお話しします。

まず感じましたのは、「ちょっと変だな、自分の常識とは違うな」という点が2～3ございました。それは、私も放送大学のテープ、ビデオの一覧表が来ますので、それを利用して、生命論とか哲学的人間とか、ゼミの材料の一部に使わせていただいて、非常に役に立っております。「こういうものが広く流布すれば、受験戦争もなくなっていいんじゃないかな」と思っていたんです。そういうところでのやり方と公開講座では、ちょっとスタイルが違う感じがしました。それは、このビデオでも出ていましたように、30分の中で、非常に効率的にメッセージを伝えるために、放送局がプロとして、どういう方法でやればいいのかということを、いろいろ考えていただくということなのかなと思っていましたら、そういうことではなくて、放送局、制作会社、ディレクター、アナウンサーが、それぞれ自己主張を持っておられて、「私はこういう考えだ」ということを申し上げても、「ああそうですか」というものでなくて、テーマがテーマだったのかもわかりませんが、考えに違う面があった。私は普通のことをしゃべっているつもりでも、アナウンサーの方が、「先生は推進論をぐいぐいやらている」というコメントがありましたように、「女の人は怖いもんだな」と思いました。成田さん、にこやかに司会なさったんですけれども、「視聴者の方が、原発の安全性に対して疑問を感じてくださるでしょう」というコメントがあって、「やはりこれは怖いもんだな」と思ひまして、いろいろ感じるものがあつたんです。

結局、名古屋大学テレビ公開講座というものを、私は、出発点において何も知らなかったんですけれども、大学ということだと、「名古屋大学が授業をするようなスタイルで、一連のことを放送局に手伝っていただいてやるのかな」という蓋然的な認識だったんですけれども、大学といっても、各教授が独立したような主張を皆さん持っていますので、プログラムを構成するという段階では大学ですけれども、最終的には各教授の主張である。それから制作側も、それぞれの個人的、会社としての主張を持っております、その力関係やバランスの中で、ある視聴者にとって非常に有益な番組ができればいい。私も、自分の主張が全面的に入れられなくても、物事は両面から見ないと現実がよくわかりませんから、両面から見る

ということが必要で、私ができる人間だと、原発のいい面、問題点、それから自分はどうか考えるかという3大話的にできたんですけれども、もう反対の方は、朝日新聞等で十分にやっていたいでいるので、余りやる必要もないかと思っていましたら、それはちょっと認識不足だったようで、非常におしかりを受けたような面がございます。

キーワードは、私、今回の経験でディスカッションであるという印象を持ちました。私が常識と思っている主張も、立場を変えてみると常識ではない。ですから、専門家といえども、ゼロのスタンスに戻って徹底的に、視聴者との間を取り持っていただくディレクター、アナウンサーとディスカッションを重ね、それで全く違う観点からテーマを見直して、短い時間の中で、非常に有効に番組をつくることが重要である。30分というのは、しゃべっていますと非常に短いですが、聞いていますと非常に長く感じるということで、日常の大学の講義で1時間半やりますけど、あっという間にたつようなものなんですけれども、それがテレビというと、30分の1秒1秒を非常に重要視して、メッセージを有効に入れるにはどうすればいいかを考えてやる必要があるので、私にとっては非常にためになったと思っております。ですから、こういうスタイルでやるということは、非常に能力も要りますけれども、私、素人で初めての経験で、2度とやる機会もないかと思えますけれども、ゼロに戻ってやるという意味では、いいんじゃないかと思えます。

簡単ではございますけれども、以上です。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

それでは引き続きまして、放送の立場から、北海道放送吉田さんお願いします。

○北海道放送（吉田豪介報道制作局次長）

頭で、今のビデオを拝見しての印象をちょっとお話しました後、我々の経験、10年間というものをお話したいと思えます。

今、田坂先生がおっしゃったように、このビデオを見て、まず、「講師の先生大変だな」と正直思ったんですけれども、大変よくできていまして、講師である先生とディレクターの立場が、だんだん対話によって接近していく。大なり小なり経験なさった方は皆さんそう思われると思うんですけれども、そういうところがよく出ていて、身に詰まされるようだ。今、原発のお話の是非は除外して、番組をつくる流れの中で、北海道放送のつくり方と違うなと思うのが、二つありました。

一つは、テキストがあるけれども、それは参考にして、ゼロから番組を組み立てようというお話がありましたけれども、随分踏み切っているなという感じがしました。もちろん、聞いてくださる視聴者の人数が、圧倒的にテキストを持たない方が多いんですけれども、本当は理想的に言うと、補完関係みたいなものがありまして、両方持っているのが、一番受講生にとってはいいんじゃないかということアピールした方がいいと思えました。

それからもう一つは、アバンタイトルに大変こだわりがあるなと思えました。特に、30分の中で、講座として持つ内容のちょうど逆方向からアバンタイトルをつくって提示しますと、分水嶺を越えてお話をすると、講座としてまとめるのが、30分ではなかなか難しいだろうなと正直感じます。

私どもの続いた講座のこれまでの取り組みを簡単に申しますと、先ほどからお話が出ていますけれども、講師の先生は、ふだん講義をしてますので、この辺はお得意中のお得意なわけです。そうしますと、得意の講義をテレビが撮ればいいじゃないかという形になりまして、この辺のお考えが強いことが、10年前スタートしたときに非常に感じました。カメラだけじゃまずいから、学生も並べてくれというイメージで出発したんです。

それから、テレビのディレクターの方は、どういう感覚かといいますと、とにかく視聴者にわかりやすく、「私がわかんなく、視聴者だってわかるわけがない」ということで、わかりやすいというところに物すごくウエートをかけまして、知的な刺激とか正確さというものが、どうしてもぼやけていくということがございます。

これは、講師の先生側と放送側で、どういうふうに考えるかが三つほどあります。一つは、先生にとっては視聴対象が見えないことは今までなかった。必ず対象がはっきりあった。しかも、知的なレベルがそろっているところに向かってお話をします。

一方で、先ほど今津先生のお話がありましたけれども、ディレクターの方は、ふだんテレビやラジオで、不特定な集団の関心を引くことを、プロとしてやっている自負があるんです。そのテクニックとして、先生がおっしゃりたいことの、ある部分をどんどん膨らませたり、あっさり「カットしてください」と言ったり、視聴者に対する考え方が逆である。

もう一つは、先ほど田坂先生がおっしゃったように時間感覚です。やはり90分1単位だという部分があるんですが、実は90分1単位ではなくて、講座は連続してきますので、わからなければ繰り返すというお話をなさいます。前回、私どもの主任講師の先生は、「大学の先生は、午前中と午後と夜の三つぐらいに分かれれば、時間感覚はそういうものなんだけど、放送局というのは、15秒短いとか、30秒カットしてくれと言う。これが一番戸惑うんだ」というお話がございました。これが二つ目です。

それからもう一つは、まさに講座内容の力点の置き方で、正確に客観的に分析的にいくために、講師の先生は、図表などを省力するのを非常に嫌うわけです。つまり、省略すると正確さがなくなるというおっしゃり方。それから、専門用語の表現を正しく使っていくことを大変大切にされる。私どもの方は、非常にすばり結論を見せたい。結論を出して、さらにつけ加えるのであれば、謎解きみたいにやってみらいたいとか、特に強調したいときは、先生のお話を繰り返すよりも、映像、ナレーション、さらに効果音までつけて、情感に訴えて、よく覚え手もらうという感じだとか、コンピューターグラフィックなどで色をいっぱいつけて、アクセントをつけるということで進め、違いが際立ってきたと思います。

平成年度に入って、北海道大学の先生と私どもの方でやり出して、一番効果的だったのは何かといいますと、一つは、話し合いの中で、講師の先生全員集まって、それに放送教育委員会の部長だとか事務局の人、それから、私ども番組をつくるディレクターが全員集まって、まずは顔合わせをしまして、テキスト、それから番組スケジュールという全体像を各講師の先生が、とりあえず頭へお入れになるという作業をやるようになりました。これからの分は、12月21日に学部の関係者が集まってやりましたけれども、これは大変いろんな意味で安心しながらやれるということと、もう一つは、先生が、番組のイメージはこういうふうだと思われながらテキストをお書きになるので、映像の注文が早くできるという部分で、効果的なも

のを一つ挙げますと、みんなですで最初に話し合うことが一番、現在プラスになっていると思います。

○司会（今津）

ありがとうございました。

先ほど出されました対話を、北海道の方ではむしろ制度化されて実行されている。

同じく番組制作側の立場から、井出さんお願いします。

○民間放送教育協会（井出定利プロデューサー）

両者の立場としての紹介をする番組としては、今吉田さんがおっしゃいましたように、大変おもしろく見させていただきました。ただ、原子力の問題に対しては余り答えがなくて、今田坂先生が、ディスカッションという視点でお話をなさいましたが、私は「難しいな」というところがわかればいいという程度の感想しかございません。それで、今津先生が整理なさってくださったセッションの上に立たせていただいて、私の経験の積み重ねの中で、お話しさせていただきたいと思います。

一つは、もう大学と放送局間の綱引きはやめなきゃいけないと思います。初期のころには綱引きがあったんです。これは今は見られません。きょう見た作品も、必ずしも綱引きではなくて、第3の接点をどこに見つけていくかというところの歩み寄りだと思います。その第3の接点というところで、きょう私は、体系的というのをキーワードとして、お話しさせていただきたいと思います。

一つには、今津先生がご指示くださいました、3の「学術研究と放送番組制作の相違性」の下の表、「学術研究の論議」を体系的と見ていただきたいんです。つまり、大学教育でやってきている内容を含めまして、何か理解する場合には、背後の知識なり、いろいろなことが積み重なってきて理解が始まるわけです。ところが、テレビは体系的なものを乗せにくいメディアなんです。荷物を載せるベルトコンベアーと考えますと、大変に乗せにくい、不得手な分野のメディアであるという認識を、まず両者が持たないと、第3の接点が大変見つけにくかろうと思います。

じゃ、テレビは何が向くかという、直感的な、むしろ非体系的なものが乗りやすい。それは何かというと、学校教育体系に乗らない、例えば笑い、涙、怒り、愛、勇気、忍耐とか、学校では教えていくことができないものは、見ればすぐわかりますから、別に理解するほどの後ろの背景が要らないものが乗るわけです。民放の今の現状を考えますと、見て理解するものはまず要らなくて、ぼんぼん感じて、見てわかる感情的なところでの勝負でやっているわけです。しかし、体系的なものを不得手なものに乗せていくには、どうしたらいいかというところが、両者のこれからの接点の論理の収斂するということでの話し合いだと思います。

そのために構成をどうするか。45分ないし30分にしても、大学の教室の30分であり45分とは、テレビの場合全く違います。先ほどから言っているように、絶対的な時間というものがありますから、その中で何を伝えていくかということは、やはり教室の論理からちょっと外れなきゃだめだと思います。

それから、着地点を変えてみる。テキストとねらいは同じかもしれません。認識の度合い

が同じものをやっても、ちょっと違いますから、着地点を変えて、テレビというベルトコンベアーに乗せるための作業として、ちょっとずらして見る。

それから、図表には吉田さんが触れていますけれども、これは大きな問題で、視聴者から、内容がよくわからないという注文は前から出ているんです。これは直観的な目で見せていくために、どうするかという話し合いがないと、なかなか先生は「いや私の知らないところで、これを出されるとだめだ」ということになりますし、「しかし、先生それをずっと出しておくわけにいきませんよ」というところで出すと、視聴者にとっては、「わからないけど、何かちょっとわかった」。それじゃ我々が満足するかという問題があります。体系的なものを乗せにくいところで、どうするかというところの話し合いの接点が、いろいろこれからなされていくことが大事であろうと思います。

ただ、実は「これはいいな」という番組が、この10年の間に幾つか出てきておりまして、それはその都度、私がレポートで発表させてもらってはいるんですが、その幾つかの事例に対しては、また後ほど時間があれば、お話させていただきたいと思います。

以上です。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

ドキュメントをごらんいただきまして、3人のパネリストの方、それぞれのお立場からお話をいただきました。フロアの方々に今の内容に関しまして、ビデオも含めまして、ご質問、ご意見等ひっくるめたいと思いますので、どうぞご自由にご発言いただきたいと思います。どうぞご遠慮なく。

○放送教育開発センター（加藤秀俊所長）

こういうところで開発センター所長が手を挙げるのはよくないんですが、手が挙がらないとなると、まずだれかが一人言うと次が続きますので、簡単に申し上げます。

今の番組で、原発問題が大変デリケートに出てきたものですから、このディレクターの方あるいはコメントをなさった方に、これは社の意見を代表しておられるのか、それとも個人の見解なのか。つまり、原発推進派だということを断定されることは、番組を見たらわかると思うんだけど、女性をいじめるつもりは毛頭ございませんけれども、これは社の意見なんですか、それとも個人の意見なんでしょうか。

○司会（今津）

というご質問でございますが、直接ディレクターとしてかかわられた梅垣さんからお答えいただいてよろしいでしょうか。

○名古屋テレビ放送（梅垣啓一ディレクター）

先生との打ち合わせのときに発言していた内容については、個人的な意見です。成田さんもそうだと思います。

○放送教育開発センター（加藤）

どの段階ですか。

○名古屋テレビ放送（梅垣）

どの段階と申しますと。

○放送教育開発センター（加藤）

つまり、社には社の方針がございますけれども、そこからどれだけディレクターというのは、制約を受けておられるのかということでございます。学者の方は公的な立場ですから。どの程度の自由度があるんですか。

○名古屋テレビ放送（梅垣）

私の自由度は、田坂先生とは5回くらい打ち合わせをさせていただいたと思いますが、打ち合わせが進むたびにプロデューサーに報告をいたしまして、構成案ができましたら提出しまして、こういう進行状況であるということを報告しておりまして、その中で、「何かこうした方がいい」とおっしゃられなければ、私の基本的な考え方で進めていきました。

○司会（今津）

それじゃ関連いたしまして、清水プロデューサー、引き続き（やはり女性は怖い）という感想も出されましたので、司会の成田さんに、ちょっと一言お答えをいただいてもよろしいでしょうか。

○名古屋テレビ放送（清水俊朗報道局社会情報部長）

大変難しい問題ですけれども、私も実は番組担当時は悩みました。先ほど梅垣君が申しましたとおり、最終的には社の判断といいますか、私の判断であります。これはあくまでも田坂先生の範囲内で、「こういう材料がありますけれど、ご判断を」ということはありまして、基本的に田坂先生には了承いただけたんですが、結果的には、先方の都合でできなくなりました。

実は、先ほど今津先生からまとめていただきましたけれども、私たちのスタンスのとり方が大変難しい問題だなど、実はこういうことは初めて経験しまして、今後スタンスをどうするか悩んでおりましたけれども、先ほど田坂先生のお話で、ゼロからのスタートである、あるいは対話であるということで、少し救われた気がいたしますが、実は、いまだにわかりません。「わからないことは、むしろシンポジウムにそのまま出しちゃおう。この中で多くのサゼスチョンをいただければ」と、これが本音でございます。

○名古屋テレビ放送（成田直子アナウンサー）

私も、司会と申しまして、本当に視聴者の代表が先生の隣に来て、お話を聞くという出発点から座っておりますので、局の意見を代弁する立場でももちろんございません。あのとき、打ち合わせから本番に至るまで、周りの意見をいろいろ聞いたり、勉強したりした中で、自分の一つの個人の意見として、全く自由度は本当に大きく、そういう意見を述べさせていただいております。

以上でございます。

○司会（今津）

加藤先生よろしいでしょうか。

今のに関連して、何かご質問、ご意見はございますでしょうか。

○名古屋大学（大谷尚教育学部教授）

今、制作側の方の意見が、どれだけ公的なものであるか、つまり、制作側の社の方針であるのかというご質問が出たときに、加藤先生が、「学者の方は公的な立場だから」と、簡単

に片づけられたように聞いたんですが、田坂先生に伺いたいんですが、田坂先生のお立場というのは、学会の公的なお立場でしょうか。

私は、この問題は、研究者が学会で公的に認められている立場、あるいは学問の成果として、普遍的に世界じゅうに認められている事実と、個人的な意見との境目をどこに置くかという問題のような気がするんです。工学というものは、例えば原子力発電所をつくるならば、どうするかということは深くかかわりますし、それに安全性を持たせたければ、どういうふうに処置をしたらいいかを研究なさいますけれども、社会全体として、原子力工学が原発をつくっていい、使っていいということの意思決定をする、そういう学問ではないわけなんです。

ですから、「これがないと困る」と田坂先生が講師としておっしゃったのは、私は、これは田坂先生ご自身の、研究者としての私的なお考えであって、学問の普遍的な成果ではないような気がするんです。その辺の境目をどこに置くかというところが問題だったように私は感じたものですから、その辺をちょっと田坂先生に伺いたいなと思いました。

○名古屋大学（田坂）

おっしゃるとおり、これは私の個人的な主張であって、何ら学会で認められているものではないんです。どこに線を置くかというのが、研究というものをとってみますと、必ず何かをやりようとしたときに、わからない点、問題点があるから、それを解決するように努力してやるわけで、それがどこなのか非常に明確にわかっていて、ここからが非常にわからないという明快な線が引けない性質があるわけです。ですから、私が推進派というように客観的には見えると思うんですけれども、工学というものは、本来何かをやりようとして、難しい点を解決するということだから、普通、工学をやりようとする人はポジティブであり、推進派でないかと思うんです。

問題点をとらえることに関しては、そう体系的な知識がなくても、この辺はこうなるんじゃないかという一点をとらえればいいと思うんですけれども、全体をとらえたときに、いい面、悪い面、両面物事すべてありますから、ビデオでダイナマイトの話をしましたけれど、非常に大工事に不可欠なダイナマイトも、戦争に使われれば非常に悲惨なものになるということで、両面ある。ある人がある主張を持っているのは、あくまで個人的であって、学会も「こういうことをやらなきゃいけない」という主張をするところではないと私思います。

ですから、最終的に突き詰めて考えれば、すべて個人の主張のぶつかり合いであり、それが、ある社会なり組織が、「ここまでは完全に大丈夫だ」という線を引くような性質ではなくて、その境界は常にぼやけていると私は思います。的確な答になっているかどうかわかりませんが。

○司会（今津）

ありがとうございました。原発というテーマでなくても、個人的にはいろいろ言えるんだけど、テレビではちょっと簡単に言えないなという発言を、ほかのいろいろなテーマでもあると思うんですけれども、関連してどうぞ。いかがでしょうか。

先ほどご質問された方よろしいですか。今のでよかったでしょうか。

○名古屋大学（大谷）

それでしたら、もう少しお話をさせていただきます。

私は名古屋大学の教育学部ですが、実は教育工学を専攻しておりまして、教育に工学を応用するという領域であります。そのために、工学というのは何なのかと以前考えたことがあります。そんなところから今の疑問が出たんです。

私、おとし、この番組をやはり担当させていただきまして、「コンピューターの教育利用」というものをさせていただいたんですが、その後で、非常に素朴な疑問を幾つか、コミュニティのおばさんとかおじさんたちから、あいさつがわりにいただいたことがあるんですが、それは「コンピューターを学校で使った方がいいんですか」ということなんです。使った方がいいか、使わない方がいいかは、我々の研究の範囲からは、実は何も出てこないんだということが、そのときに初めてわかったと言っては恥ずかしいんですが、強く感じたんです。我々が研究しているのは、使うとしたら、こう使った方がいいということであって、使った方がいいか、使わないかを研究しているんじゃないんだということが、そのときに気づかされたという気がするんです。

先ほど田坂先生が、「どんなことも主張のぶつかり合いだ」というふうにおっしゃいましたけれども、例えば、考古学の先生などがご出演なさって、「日本の民族は騎馬民族であるとかいろいろな説があるけれども、こういうふうに出土しているものから考えると、こういう考え方と、こういう考え方がある」ということをおっしゃれば、それは主張のぶつかり合いではなくて、学問的な成果としてあらわれているものを、そのままお話をすることができます。

しかし、これからどうしていくかという意思決定にかかわることを、我々がテレビで話そうとしますと、授業で話す場合には、「こういう意見が出ている。こういう成果がある。私はこう思う」ということを、非常に私的に切りかえながら話をしていくことができますが、テレビに出るということ自体が、もう公的な意見の表明になるという立場に立たされますので、その辺を切りかえながら、細かく話していくことが難しくなるような気がするんです。

ですから、我々が大学でいつも授業をしているときに、上手にその辺を知らず知らずのうちに、切りかえながら話をしていけた面が、テレビに出た場合には、制作の方との関係もありますし、視聴者との関係もありますし、非常に難しくなるんだということを、改めて制作側の方も我々も強く自覚しなきゃいけないなということを、私はきょうのビデオを見せていただいて、またパネリストの皆さんの話を伺って、強く感じた次第です。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

第1セッションのテーマは、「学術研究と番組制作の対話」ということですが、こういう表題の設定の仕方自体が、実はやや荒っぽ過ぎる。今の各先生方、ご発言された方々のお話をお聞きしながら、大学の立場、学会の立場、個人研究者としての立場、一プロデューサーとしての立場、所属する民放の会社としての立場と、それぞれ少し細かく分けていって考えていかないといけないということにもなりそうだなと思ったんですが、もう一度パネリストの方々にお伺いしたいと思いますけれども、吉田さん、今の議論に関しまして何

かコメントございましたら。

○北海道放送（吉田）

大変難しいテーマですけれども、基本的に番組のつくり手として、頭あるいは背中に、いつも会社の立場というものを持ちながらスタートするのではなくて、最終的にせめぎ合ったときに、「会社としてはどうなんだろう」というバックアップというものはありますけれども、番組づくりの中に、いつも会社という感覚と一緒に、パラレルにいているということはないと思います。

今、名古屋テレビのディレクターの方もおっしゃったように、やはり個人的な形で取り上げる。たまたま私どもの大学放送講座10年の中で、そういった部分のテーマを選ばなかったというところがあるんですけれども、3年前に生体工学というものをやりまして、これは当然、人口臓器みたいなものが出てまいりますけれども、工学部の方からの番組づくりのお話だったもんですから、機能だとか、それから材質だとかというところにウエートがかかっていまして、死と生みたいな部分には絡まなかったということを経験しております。

○司会（今津）

井出さんいかがでしょう。

そういうので、これから済ませられるかなと思うんですけれども、かなり微妙なテーマを使わざるを得ないという気もするんですが。

○民間放送教育協会（井出）

私も、こういう番組をつくったときには、会社の立場は考えたことはございません。

ただ、先ほどの作品では、電気を使わない人々を最初の話し合いのところに持ってきてやろうということだったんですが、恐らく私だったら提示をしなかっただろう。その辺のところを所長も思われて発言なさっていたと思いますけれども、僕だったら別の扱いであつたろうと思う。

しかし、30分の中で、原子力の是非の問題では、まず討論は無理だと思います。ある会社で「朝まで生テレビ」ということをやっても、これは限界になるわけで、どこで妥協して、30分で何をというところは、話し合いはまた別にあったんだろうと思いますけれども、その辺は難しく、僕はわかりません。

ただ、そこから離れますけれども、例えば。「この方法はいいな」という芽が芽生えている作品が毎年幾つかございまして、事例を挙げさせていただきながら、もちろん、私の先ほどの体系的というキーワードを、それじゃどうするかというところでの、先ほどからやさしくとか、理解しやすくという言葉が飛び交っておりますけれども、これがテレビというメディアに乗せていくための一つの言葉として出てきているんですが、ただ、やさしくだけで解決はつかないと思うんです。やさしく取り扱う内容というのは、大抵論理的であり、実証的であるというところで、直感的に流れている絶対的な時間の中で、テレビでどうやるかというところは、一つの話し合う方法にはなるとは思いますけれども、僕はならないと思います。

その点、まだ放送局側も、実はテレビは万能と思っている人が多いんです。目と耳が使えると何でもできると思っている人は多いんです。実はそうではないんです。大変不得手な分野が学問の世界でございまして、その辺のところに向けて、もっと私どもも調査研究と

いうところは、幾つか私もテーマを持っておるわけでございますけれども、事例として、2～3挙げさせていただきますと、一つには、5年前にコンクールがありまして、1位になりました新潟大学の脳の話でございます。

ごらんになっていらっしゃる方が多いんですが、脳の話をしたわけですが、そのときにその先生が、ただ脳の手術とかを話すのではなくて、脳がいかにすばらしいかということをお話されたんです。情報的なものはテレビに大変乗るんです。体系的なものではない分野です。怒りとか感性とかそういうものですから、ちょっとした微妙なところでテレビに乗っていくんです。

「脳のお話をしましょう」ではなくて、「脳がいかにすばらしいか」というところで、さらに番組がすばらしかったのは、脳梗塞などを追いながら、X、つまり、わからないところが、だんだんとわかってきたりする歴史的な視点を追いながら、実は脳梗塞という言葉が誕生したところの、脳のような働きの修復されているところへ、学会で発表された成果を取り入れながら、Xを追うという構成に乗って全くすばらしかったです。

このXを追うとか、歴史的な視点は大変にいい視点でございます、例えば、相対性原理のお話をしても、恐らく僕らにはわからないけれども、そこに到達した天才たちならどうやって考えてきたかなということが実によくわかる。これは人間くささという情緒的な面が入ってきますから、これも乗りやすいところがございます。

脳のお話がすばらしかったのは、「先生どうしてこういう授業を私たちにしてくれなかったのか」と、スクーリングで学生が言っているんです。今までこういう声を僕はスクーリングで聞いたことはないんですけれども、これは先生が文学的なお話をされた。これはもっともっと分析して、その成果を取り入れることだろうと思いました。

それから、状況提示がテレビでは大変強いです。論理が弱いんですけれども。こういうものは講座に強いという、例えば、聞きなればニュースでも使った状況というのは絶対強い。ただ、なぜ使ったかと、同じところから新聞とか別の事件になりますけれども、状況提示の中で成功しているのは、実は地質学の分野が多いんです。

特に僕が印象に残っておりますのは、2～3年前に大きな地質をやったときに、大変難しい専門的な言葉で話しているんです。ところが、出てくる映像は浸食の激しかったり、あるいは変動の激しかった外形学から、前で話したりする典型的な絵なものですから、難しい言葉で話されてもわかるんです。これはやはり映像の持つ、学歴を越えた、学歴というものがない人でもわかるハンドパワーを、ちゃんとそこで典型的な映像を出しながら話していらっしゃるところが大変いいところで、幾つかその辺は、去年北海道の氷河、日本には氷河があるとは僕は知らなかったんですが、氷河期というのがありまして、北海道のなだらかな地形というのは氷河が着くと、その前を先生がバックで撮って話されて、これはホームメディアにない大学講座というものが、テレビに乗っていくすばらしい成果だと思います。

地質というのは、田坂先生の分野にありますけれども、ブラックボックスじゃありませんので、背景になる地質がそこにあるということが大変強いんです。今の体系がブラックボックスではないので、大変わかりやすいというところがあるんですが、こういうところは大変にあちこち成果が上がってきておりますところで、またいろいろな接点のところで、これ

からの話し合いがなされればいいなと思います。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

学術研究の世界、そのものについてのお話が出されましたが、今度は、テレビ放送の映像の世界の、長所とか短所という話に向かって、だんだん議論が深まってまいりました。

それじゃ、予定いたしましたとおり、ここで約10分間ぐらい休憩をさせていただきます、17分ぐらいから再開をさせていただきます。再開と同時にもう1本、今度は5分ぐらいのビデオをごらんいただきたいと思いますので、17分にはこの会場にお戻りいただきます。どうぞよろしく。

○総合司会

それでは、ただいま今津先生からご案内いただきましたけれども、ここで10分間休憩をいたします。第1セッションの後半は17分ぐらいからということでございます。それまでには、必ずお席の方にお着きくださいますようお願いいたします。

ロビーの方にコーヒーを用意してございますので、どうぞしばらくの間おくつろぎくださいませ。

休 憩

○総合司会

それでは、第1セッション後半に入らせていただきます。今津先生お願いします。

○司会（今津）

それでは、今度はラジオ講座の番組の一つの事例を見ていただきたいと思います。テーマは「登校拒否－家庭と学校のはざまで－」です。

[V T R]

○司会（今津）

今回、非常に短いテープでございまして、最後にラジオの制作のディレクターが、何を消費者が求めているのかを言わせようと、執拗に食い下がっているシーンがございました。

さてそれでは、今のドキュメントを見ていただきまして、ラジオ制作の立場から、中国放送の田島さんにお話をお願いいたします。

○中国放送ラジオ局（田島明朗放送制作センター専任部長）

ディスカッションを十分に済ませた上で、話の上手な講師の方を迎えると、よくこういう情景がございまして。東海ラジオの町田さんが、ハウツーものにするかどうか、結局最後まで結論が出ないでスタートなさって、私どもの放送を伺って、テープを拝見しておりませんので、申しわけありません。

ラジオ講座の9割以上がほとんどこういう形でつくられている。最初に講師の先生をお招きして、男性でしたら女性のアシスタントが質問をする。それを持って行って、ディレクターが指示を出すという形が一番多いんじゃないかと思います。

広島大学も、ことしが教育問題でございまして、ほとんど東海ラジオさんと同じようなも

のをつくりました。ことしは私も、スタジオに講師の先生をお招きしてつくりましたので、よくわかります。

ハウツーがいいのかどうか、そのご論議は後で皆様からお伺いするとしまして、ラジオの番組の制作過程をテレビで説明する、画面で見せるということに、私少々困っているわけがございます。事ほどさように、ラジオは視覚に訴えることができないから、テレビには及ばないという考えが一般のようです。ラジオ講座は、理工系よりも文化系のものの方がいいのではないかというのが相場になっている。私は、ラジオ講座のプロデューサーとしまして、ラジオというものは、テレビと同等、あるいはつくり方によっては、テレビでできない、テレビ以上の効果を上げることができる媒体であると確信しておりますので、いただいております10分間を利用していただいて、その説明をさせていただきたいと思います。

広島大学の場合、公開講座も11ございますが、これが回りまして順番に担当する慣習が長く続いておりました。最近ちょっと変わっております。したがって、ラジオで法学部の講座、あるいは医学部系の講座に取り組んでございます。その中の一つ、平成元年度の歯学部「歯の健康」という講座がございました。これをラジオでどのようにつくったのか、短いテープですが聞いていただきたいと思います。

[テープ]

○中国放送ラジオ局（田島）

どうもありがとうございます。

唇顎口蓋裂。舌で触れていただきますと、口の裏のかたいところが切れている。唇裂の場合は、いわゆる三つ口でございます。この唇顎口蓋裂の治療というのをラジオの講座にする場合、これが、先ほど井出プロデューサーが言われました「ラジオでも状況提示が必要だ」という話で、この講師の先生に約1日かけまして、スライドを使って、唇顎口蓋裂というものは一体どういうものなのか、その原因、治療法、手術、アフターケアと、いろいろ勉強させていただいた上で、主任教授に「患者さんを1人紹介してください」とお願いしたんです。「患者といっても、1歳ぐらいで手術するんだよ」と言う。「じゃそのお母さんを」とお願いしまして、母親にインタビューいたしました。これは手術を受けるために入院したとき、手術の前日、それから手術が終わって退院する前日の3回聞いております。それからオペの部屋にも、でんすけまで消毒して入れていただきました。

その母親に聞いた声というのは、一切講師にはお聞きいただいてなかったんです。講師に今度いきなり、この母親の最初の「自殺を考えました」という言葉を聞かせましたところ、ごく自然に「非常にお気の毒です」という話をされた。それで、一番初めの状況提示が終わって、あれは45分の番組なんですけれども、実際にはテープは3分少々ぐらいに編集いたしました。大体雰囲気はおわかりいただけたと思います。

講師には、後で編集したテープをお渡しして、「これでいかがでしょうか」とお伺いしましたら、「唇顎口蓋裂がドラマになるのか」と言う。私は「それはドラマにならないんです。録音編成と言うんです」と申し上げました。このテープは、いまだにこの教室に、年間60人ぐらい三つ口そのほかで入院してくる患者さん、その親に、まず三つ口というのはどういうものなのか、その手術はどうするのか、アフターケアはどんななのか、心配ないんだという

ことを教える教材として聞かせている。したがって、まだ使われているテープでございます。2次利用になりますか、3次利用になりますでしょうか。そういう使い方を広島大学の歯学部でしていただいております。

私のラジオ講座のつくり方というのは、かなり型破りで、偏っているかとも思いますけれども、「ちょっと先生短いですよ」とか、「お時間ちょうどよろしゅうございました」という番組も必要ですけども、そればかりでは進歩はないと思ひまして、あえて問題提起の意味で、今のプログラム構成をお聞きいただいたわけです。

つまり、テープにより、より簡単にできます外での録音取材を大分いたしまして、もっともっと生きた番組にする必要があるのではないかと。視覚のないラジオ媒体だけに、強く感じます。

それから、講師の先生が、スタジオで上がられるような場合には、無理にスタジオでお話を伺わなくても、ラジオでは十分です。講師の先生のご指導で、ある研究室に携帯録音機を持って行ってダビングしたものが、今年の講座18本の中で何本かございます。

それと、編集がラジオの場合かなりあります。一時期「大学の先生のお話というのは、はさみを一切入れてはならないんだ」という局も、大学もございました。その時期は、ある程度通り越したんじゃないかと思ひますけれども、スタジオならスタジオに来ていただいて、幾ら先生がとちっても、つかえても、熱を入れて話していただければ、それで八分どおり番組は成功したものです。ただ、後の編集作業は格闘になります。

最後に、これも3分弱でございますけれども、編集をする前と、それから編集をした後、どの程度講師のお話が変わっているのかを聞き比べていただいて、私の発言の最後にしたいと思います。

[テープ]

○中国放送ラジオ局（田島）

この後編集をしたものでございます。

[テープ]

○中放送国ラジオ局（田島）

非常に実戦的なことに限りましたけれども、私の報告を終わります。

○司会（今津）

ありがとうございました。

編集という大変ご苦勞な仕事だと思ひますが、貴重な問題を提示していただきました。

それでは、今のラジオの事例を含めまして、前半のテレビの事例も踏まえて、コメンテーターの多田さんの方から、お話をお願いいたします。

○放送教育開発センター（多田）

スケジュールが少々遅れておりますので、簡単に感じたことを述べさせていただきます。

最初に、前置きになりますが、今回の第1セッションのテーマについて、私の感想を申し上げます。

昨年、一昨年と新潟大学、北海道大学で行われましたシンポジウム第1セッションで、それぞれ受講生探しということをやしまして、本年度は「知の構成と放送—学術研究と番組政

策の対話一」ということで、お配りくださいましたレジュメの2ページにもございますが、学術研究と放送番組制作の性格を考えて対比してみますと、学術研究というのは文字に対応している。放送の方は映像を使う。あるいは前者が抽象的、論理的であれば、後者は直接的、感覚的。制度的に見てみますと、大学、それから放送局の中の仕事。さらに人で考えてみますと、主任講師とディレクター。さらに、ちょっとこれは適当でないかも知れませんが、印刷教材というような対比もできるかと思います。

いずれにしても、学術研究と放送という二つの論理を利用した大学公開講座と言えるわけで、いわばこの公開講座を構成している最も大事な二つの構成要素であると言えるかと思っています。

こういう極めて本質的、基本的な問題を、このたび改めて名古屋大学が提起してくださった。非常に意味のあることではないかと思っています。まずその辺を申し上げたいと思います。

先ほどから10年と言われておりますけれども、10年は恐らくシンポジウムが始まって10年だと思います。昭和53年だと思いますいから、始まってから15年です。15年と言いますと、昔ですと、成人に向けてのそろそろいろいろな衣装がえと申しますか、そういうところに来ているのではないかという気もいたします。

本論に入りますが、既にいろんな方が、いろんな角度から大事な問題を提起されまして、私自身メモはとっておりますが、大変混乱しております。理解がはっきり整理されているとは、ちょっと言いがたいわけで、皆様方のご報告と重なるところがあったり、あるいははみ出したりするところもあるかと思いますが、1～2の気がついたところを述べさせていただきます。

初めに、二つのテレビを拝見しまして、これはドキュメンターで、テレビ講座とラジオ講座の両方拝見したわけですが、前者の方がずっと長くて、後者の方は短いです。改めてこれを拝見しまして、この二つの論理の違いを非常に痛感させられました。

今まで、毎年で上がった放送番組を指導したり、あるいはで上がった印刷教材に目を通したりしていたわけですが、きょうは、いわば楽屋裏と申しますか、講師とディレクターの生のやりとりを見ることができて、大変興味深く拝見したわけですが、先ほど皆さんがおっしゃっておられるように、非常に難しいなという感じがいたします。

難しいというのは、どういう意味かと申しますと、東先生は、「自分が言いたいことを通すから、向こうで求められていることがどうも食い違う」という言い方をされました。それから、田坂先生は、にこやかにやっているようで、結構中身は厳しかっただろう。やりとりがかなりスムーズじゃなかったということだろうかと思います。

そもそも学問的な内容は、やはり抽象的、論理的、分析的でありまして、専門的な概念で構成される世界であります。それは、具体性のある映像とか音声であらわすことで、そもそも大体無理がありますから、どうしても映像にし切れない、音声にし切れない部分があるかと思っています。したがって、議論をしても、どうしても隔靴搔痒を免れない。結局は通俗的な結論になりますが、議論を重ねて歩み寄るほか手がないということが言えるんじゃないかと思っています。

先ほど飯島先生が、イギリスのユニバーシティという例を出されましたが、3年ほど前に、

その副学長がセンターに見えて話をしていただくことができたんですが、外の人を連れてきながら、どれぐらいうまく進行しているか伺いましたら、「みんな神経がおかしくなるほどやり合って、もうその席に出るのが嫌になるぐらい議論する。感情的にもなる」と副学長が言っておりまして、そういう意味で、もともとが無理と申しますか、形のないものを映像化する、音声化するという非常に難しい作業でございます。そういう意味では、結論的には、少々行き違いがあっても議論して、歩み寄っていくのほかないというのが、恐らく結論ではないかと思います。

それと今度の場合、非常に私が感心いたしましたのは、ビデオの最初の方で、テキストの内容を映像化するのではなくて、もうちょっとテキストから離れて、何をどう伝えるかということを試みたとおっしゃる。これはある意味で、非常に大事なことではないかと感じました。

基本方針として三つ挙げられまして、その第1番目が、「テキストは参考資料とし、担当講師との話し合いを重ねながら、内容構成をゼロから作成する」という話がございました。これはさっき吉田さんから、非常に有益だというお話がありましたけれども、テキストとの相応性とか相互関連というものを考えますと、非常に問題がややこしくなります。それをゼロからということに踏み切って始めたということで、ちょっと後段の方と関係いたしますので、その点非常に大事なことだろうと思います。新しい問題点を投げかけたと私は思うわけでございます。

それから、番組をつくる場合でも、あくまで学問内容が前提としてあるわけでございますが、学問内容が活字になったものが印刷教材になるかと思いますが、例えば、最初のビデオで、講師とディレクターの方のやりとりがありまして、最初は非常にずれていたのが、最終的には一つの形になるわけですが、その場合、テキストからそのまま映像化したんではないということはわかるんですが、かなりテキストめいたものが、そもそも主任講師の頭の中にあるわけで、それを示した上で初めて、番組制作が始まるというのが手順になるかと思っています。

したがって、テキストの映像化は避けてということが話の中で出てまいりますけれども、原子力発電と環境などの印刷教材も、それから放送番組などを見ていると、やはり、かなり内容に沿った番組になっているということが、私、強い印象として残ったわけです。学問内容のテキストという感じを持たざるを得なかったということでございます。

いずれにしても、制作方針あるいは制作方法といったものを具体的に示していただいて、内容が具体的であるだけに、非常に議論しやすくなったという感じがいたします。そのことと、今津先生につくっていただいた小さなレジュメがございましたけれども、これは恐らく、今後の放送利用大学公開講座の番組あるいは印刷教材と考えております。基本的な枠組みを提出していただいたという気がいたします。

もう一つ申し上げたいことは、視聴者の二重構造、これは前からよく言われておるところでございます。番組だけの視聴者あるいは視聴者の方に対して、「今回は印刷教材を持っていない大多数の人たちにわかりやすく、疑問にこたえられるように制作したい」ということを、最初の番組のディレクターの方もおっしゃってたし、きょうの議事次第などを見まして

も、「何はともあれ、番組だけの視聴者に対して、いい番組をつくることが重要課題だ」ということを言ってらっしゃいます。この場合に、いい番組とは何かということを考えると、いわば印刷教材を持たない人たちに、内容が的確に伝わる番組と言いかえられるんじゃないかなという気がいたします。

これを前提といたしますと、幾つかの問題点が出てくるように私には考えられます。要するに2種類の視聴者が存在する。例えば、500人のモニターに対しまして5万人の視聴者がいる。5万人の視聴者は、もちろん番組を見っ放し、聞きっ放しになるわけです。500人のモニターは、印刷教材を併用して勉強することを期待されている。したがって、5万人の視聴者にも満足できる番組をつくる場合には、印刷教材は、全く無視してつくっていくことだろうと思います。そうすれば一応完結するわけです。印刷教材の相応性とか相互関連ということは考えないで済むわけです。その場合には、先ほど申し上げましたように、講師とディレクターが緊密に対話しながらつくる以外ないということになります。

私が気になりますのは、問題のもう一つのグループでございまして、モニターである受講生の問題です。繰り返しになりますけれども、受講生は印刷教材と併用しながら勉強するわけです。番組の方が、もし印刷教材をもたない視聴者にも、内容が的確に伝わるものをつくると、モニターの方は、「印刷教材があれば、もう少しよくわかるという程度のことか」という話の重複になるわけですが、それでしたら、ごく単純なガイドブックみたいなものがあればいいわけですが、現実には、非常に立派な印刷教材がたくさん出ております。いわゆる補助的な教材というものからほど遠い立派なものが出ております。執筆要領の中には、あるいは独立した読み物として、一貫性のあるものとか、図書として利用できるようなものをつくっている大学もかなりあると思います。分量的にも構成的にも、あるいは記述の方法、さらに編集、装丁に至るまで、かなり十分に工夫された書物、あるいは書籍と呼んでいいものが出ています。これはやはり、放送利用の大学公開講座には、もう一つの目的が当初からあったんじゃないか。

どういうことかと言いますと、メディアを利用して行う大学教育によって、大学教育が改善されていくことが目標になってきたんじゃないかという気がするわけでございます。したがって、そこから出てくる問題は、やはり印刷教材の位置づけということになるのではないかと。掘り下げていくと、どうしても印刷教材に行き着く。さらには、印刷教材と放送番組の相互関連ということになるのではないかと思います。

このセッションで明確に示された番組だけの視聴者が圧倒的に多数を占めている。その人たちのために、まずいい番組をつくることが重要な課題だという一種のテーゼが、非常に重要な意味を持っていると思います。5万人とすれば、4万9,500人が見っ放し、聞きっ放しです。その人を念頭に、印刷教材は無視して、その人たちのために、その人たちがわかるような番組をつくるのが傍らにあると同時に、500人あるいはその周辺にいる1,000人あるいは1,500人の少数のための印刷教材というのは、その人たちにとって、どういう意味を持つかが、次の問題になってくるのではないかという気がします。

番組制作は、例えば、概数は5万人でございまして、これは、いわば広く生涯学習にかかわる視聴者でございまして、そのほかの500人あるいはその周辺は、むしろ高等教育のあり

方にかかわる面が多いんじゃないか。もっとも、両方が重なっている部分もございますけれど、そういう位置づけも、ある程度できるんじゃないかという気がいたします。

両方の教材の関連をどう考えるかという場合に、放送大学の教育方法を補助線として横に置きますと、かなり相違点がはっきりしてくる。それはご存じのように放送大学では、似たような英会話教育のシステムをとっておりますが、テレビ、ラジオ、ニュース番組の場合、45分、15回。印刷教材の場合、それと同じ時間の印刷教材学習で、両方あわせて15回、2単位です。放送番組は、はっきり不特定多数ではなくて、印刷教材で学習する受講生を対象につくられていると思うんです。一般不特定多数は考えていない。一般の人たちは余り相手にしていない。主目的は、やはり印刷教材で学習する受講生ではないかと思うんです。しかも、印刷教材は全部市販されているんです。これは単位取得を考えなくても、どこでも買えるというシステムになっております。

したがって、生涯学習あるいは高等教育という両面を考えてまいりますと、当然、単位化の問題がちらほら出てまいります。その場合に、番組の性格あるいは印刷教材の内容といったものが、今の高等教育とどう関連してくるかという、非常に大きな問題になってくるんじゃないかという気がいたします。

放送番組あるいは印刷教材それぞれについて、明日第2セッションで十分議論されることになると思いますが、視聴者が2種類あることについて、もう少しきちんとした方針を持っていかなければいけないのではないかという気がいたします。

ちょっと舌足らずになりましたけれども、一応問題点だけ申し上げまして、何かありましたら質問ということでお願いします。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

特に、印刷教材の点につきまして、いろんな角度からご指摘いただきました。

時間が予定より過ぎておるんですが、始まりが遅かったものですから、お許しいただけたら、時間を延長させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

先ほどの、ラジオ番組の制作の事例のドキュメントに帰りたいと思いますが、中国放送の田島さんからご紹介があったように、広島大学の方で、ことし教育問題で、確か不登校の問題にも触れられたというお話ですけれども、ドキュメントにあったように、視聴者の声というハウツーあたりについてのやりとりが、広島大学の方でもおありになったんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。高橋先生あるいは若尾先生、お願いします。

○広島大学（若尾裕学校教育学部助教授）

広島大学の若尾でございます。

直接今泉先生という方がなさったので、私も存じていないんですけれども、今言われたような問題は、私自身が、昔ラジオ番組を担当いたしましたときに、進行役として出たことがあります。そのときに非常に身に詰まされるような、つまり、半分放送局側にあるので、何とかこの放送をまとめないかという立場に立ちつつやったものですから、よくわかると思います。

今のは、非常にはっきり言いますと、歩み寄りの問題、まさにそれだけの問題ではないか

と私は感じます。つまり、大学の教科の方も「ああも言えるし、こうも言えるし、結局よくわかりません」というのではなくて、「簡単に言うとうこうなります」という勇気も、ある程度必要ではないかという点と、ディレクター側も、番組をまとめるという論理の方で余り迫らないように、その辺理解をいただくという二つで、歩み寄るしかないのではないかと私は思っております。

以上です。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

今のに関連して、どなたかご発言いただけないでしょうか。

○北海道大学（阿部和厚医学部教授）

北海道大学です。今のハウツーの問題が、私の番組で問題になりましたので、お話ししたいと思います。

ハウツーということと、先ほどラジオの方で出てきますけれども、豊かさという、この二つのキーワードですけれども、北海道大学では、新潟と一緒に共同研究をやった中から、双方向のはがきというのをやっておりますが、そのはがきのところで、テレビのところですが、ことしは北海道大学では、「北海道の住まい」という、言うなれば、題名から、寒さに適応した家の建て方というのが皆さん想像できるような番組だったんですけれども、題名からはそうだったんですが、双方向の大学の中でやりましたところに、今までの長い北海道の厳しい住まいを、幾つも改善して住んできた。その中で、「大変で、最近の建物はどんなでしたか」という話に講師の先生が答えて、今の高い立派な建物が本当に豊かなのか。昔、炭坑長屋に住んでいたときの方が豊かだったのではなかろうか。要するに、それが非常に番組のねらいにぴったりというか、一つの視聴者がつかんだ、ねらったところがきちっとつかまっていたというところじゃないかと思うんです。

最初に申しましたように、いかに冬の建物を建てるかと、皆さんがイメージするところを、ハウツーものではちょっと困るのではないかという話を、放送局の方から講師の先生にいただきまして、非常に的を得た、よくわかったという感じだと思うんです。それに答えて、講師の先生方、実際にそのことをちゃんと意識しておりまして、それは土台であって、本当は北国の季節のもたらす豊かさを本当のテーマ、哲学にしている。そこで、こういった放送講座の意味があるということがあったんじゃないかなと思います。ハウツーだけでしたら、そこらじゅうにたくさん事例があります。そういう今まで一般の人が余り考えていない、新しい視点を与えるというところに、また大きな意味があると思います。

以上です。

○司会（今津）

どうもありがとうございました。

今のお話の中に出た、共同でやられたという新潟大学さんの方。お名前が出たものですから、つい新潟大学さんにちょっとお話いただけたらと思ったんですが、どなたかお願いできないでしょうか。

もう時間がないので、明日話させていただきということです。

そうしましたら、中途半端になってしまったかも知れませんが、これは第1セッションでございまして、恐らくここで議論された内容は、明日の第2セッション、第3セッションにつながるものではないか。そういう意味では、私たちは、今問題提起になればというつもりでございました。結論が出るということもございませんし、このテーマ非常に大きいので、永遠のテーマではないかということもございまして。ぜひ明日の第2セッション、第3セッションの方で議論をしていただけたらと思います。

私の時間配分等の不手際で、多くの方にご発言していただけないということで、大変失礼をおわびいたして、これにて、ひとまず第1セッションは終わりにしたいと思います。パネリストの方々、コメンテーターの方どうもありがとうございました。(拍手)

○総合司会

どうもありがとうございました。皆様、大変お疲れさまでございました。

それでは、これで第1セッションを終了させていただきます。この後、5時30分から、お隣の銀扇の間を会場といたしまして、懇談会を開かせていただきたいと思いますので、そちらの方にお集まりくださいませ。

なお、あすは朝9時の受け付け、9時30分の開会でございます。あすの第2セッションは分科会となりまして、第1分科会はこの金扇の間、そして第2分科会はお隣の銀扇の間で行いますので、各自ご自分が出席なさいます分科会の会場の方へお集まりいただきたいと思います。

それでは、本日お配りいたしました資料は、あすは分科会となり、お席が変わりますので、皆様ご自分でお持ち帰って、そしてあすまたお持ちいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

本日は、皆様お疲れさまでございました。ありがとうございました。

(参考) 第1セッション配付資料

第10回放送利用の大学公開講座シンポジウム
「知の構成と放送－学術研究と番組作成の対話－」

知の構成と放送 －学術研究と番組制作の対話－

1. テーマの内容

放送公開講座を利用する人々は、番組だけの視聴・聴取者が多数を占めており、何よりもまず「良い番組」をつくることが常に重要な課題である。そこで、知の構成という観点から、番組作品の制作過程を検討し、学術研究の論理と放送の論理の相違性と協同性に焦点を当てつつ、両者の対話を試み、大学と放送局が共に番組を制作していくうえでの諸問題と諸課題を明らかにする。

2. ドキュメント『知を構成する－学術研究と放送－』

(1) テレビ講座番組制作過程の事例

〔平成4年度名古屋大学テレビ放送公開講座『環境を考える』から〕
第5回「原子力発電と環境」(担当講師：田坂完二・工学部教授)

《テキスト内容》 第1節 エネルギーの必要性
第2節 地球環境を護るために
第3節 原子力発電所の安全性について
第4節 20世紀から21世紀へ

(2) ラジオ講座番組制作過程の事例

〔平成4年度名古屋大学ラジオ放送公開講座『現代人の心の健康』から〕
第5回「登校拒否－家庭と学校のはざまで－」(担当講師：平石賢二・教育学部助手)

《テキスト内容》 第1節 登校拒否とは
第2節 登校拒否の状態像
第3節 登校拒否の発生原因と心理的メカニズム
第4節 登校拒否児童・生徒への援助

3. 学術研究と放送番組制作の相違性

表1 学術研究と放送番組制作の相違性

二つの論理 相違点	学術研究の論理	放送番組制作の論理
1) 基本表現形態 時 間 言 語 対 象	制服なし 文 字 研究者仲間	厳しい制限あり 映像・音声 不特定多数の人々
2) 問題設定	先行研究の上に位置づけ	日常現実生活より生々しく抽出
3) 問題への接近法	方法・過程の重視 (定義、学術用語、実証性、厳密性、 論理性、一貫性など)	結論の重視 (映像・音声の積み重ねによる事実 のストレートな伝達など)
4) 認識方法	客観的分析的、情動の抑制	主観的直観的、情動の発露

(参照／今津孝次郎「大学開放と放送講座」第2章、『生涯学習ニーズに対応する大学教育の役割と課題』名古屋大学教育学部、1992年、所収、pp.45-7)

4. 知の構成における大学と放送局との協同体制

(1) 学術研究と放送の対話

- 1) 知の構成から見て、大学放送公開講座制作のこれまでの取組みはどうであったか？
- 2) 学術研究と放送番組制作との間にある対立・葛藤・組語などは、具体的にはどのようなものか？
- 3) そうした対立・葛藤・組語などは、どのように乗り越えられている（いない）か？
- 4) 学術研究にとって、放送のもつ意味は何か？
- 5) 放送にとって、学術研究のもつ意味は何か？
- 6) 変動する時代は、両者相互の歩み寄りを求めているのではないか？
- 7) 両者の利点を結び合わせると、そこから何が生まれるだろうか？

(2) 大学と放送局の役割分担

- 1) 講座全体の大テーマは、どのように選択して設定すればよいのか？
- 2) 毎回の小テーマは、どのように選択して編成すればよいのか？
- 3) テキストと放送番組内容は、どのように関係づけければよいのか？
- 4) 各番組構成案は、どのように作成すればよいのか？
- 5) 番組の導入・展開・結論部は、どのように検討し考案すればよいのか？
- 6) 映像素材・音声素材は、どのように取材・入手し、どのように活用すればよいのか？